

第 39 話 (22 頁) カイコとクモ

カイコがまゆを作っていると、クモが糸を出しながら、カイコをばかにして、わらいました。

「おとなしい仕事をするものだね。どうだい、おれの仕事ぶりは。おれの糸の長いこと、長いこと。」

カイコが言いました。

「きみの糸はほんとに長いね。でも、それだけでしょ。ぼくのまゆはね、お金になるんだよ。」

「この話はとても短いので、どうとらえたらいいか、悩むね。」

「カイコはよくって、クモは悪い。そういう評価ははっきりしている。」

「カイコの糸は金になって高級で役に立っている。それに引き換え、クモの方は……、と。」

「だいたい、クモが自分の糸の長さを自慢して、カイコをばかにしたところから話が始まっている。クモに分はないよ。」

「カイコだって負けていない。逆に、自分の繭の金銭価値をひけらかしている。」

「どっちもどっちか。本当に自慢できるものは何なのか、と考えさせたかったのかな。」

「なんでも誰のことも馬鹿にしてはいけない、見た目だけでは分からない、そう考える子もいるのでは。」

「絹は貴重で、特に西洋の人は欲しがった。中国からの『絹の道』があったぐらいだからね。この話も、そういう歴史が背景になっている気がする。」

「そうだね。トルストイも絹にはずいぶん関心があったのか、『アーズブカ』の中にも、養蚕に関する話が二つ出ている。『中国の王妃、西陵氏』(96 頁)と『ブハラ人とカイコ』(105 頁)。養蚕は中国で始まったというわけか。」

「ところで、クモの糸って、本当はずいぶん使い道があるんだ。」

「まず、とても強い。弾力性もある。ナイロンが 1938 年に発明されたときの宣伝文句が『石灰と水と空気から作られる、クモの糸よりも細くて、鋼より強い繊維』。クモの糸の強度はナイロンよりやや劣るが、弾力性は 2 倍だつてさ。」

「米軍では、クモ糸の遺伝子をバクテリアに組み込んで張力が鉄の 10 倍という糸を作らせ、防弾チョッキやパラシュートの紐に使っているそうさ。」

「クモだって蚊や蠅を食べる益虫だし、どうしてあんなきれいな正六角形の網を張るのか。なぜ自分の網にはかからないのか、という疑問もまだ科学的に解明されておらず、クモの研究は発展途上らしい。」

「ふーん。クモって不思議な生き物で、奥が深いんだ。」

「宗教哲学者の久松真一さん（1889-1980）が著作『基本的公案』の中で、カイコの糸とクモの糸を対比して考察を進めている。」

「興味深いね。どんな内容なんだい？」

「WEB上の要約の要約になるが、蚕は自分で紡ぎだした繭に閉じこめられてしまうのに対し、蜘蛛はよほどのことがないと自分の張った網の中心から離れない。そして、自分の世界の一切のことが手に取るように分かるのだと…」

「そこから久松さんは『この蚕と蜘蛛との違いは、何か役に立つ寓話にならないか。現代、また将来、我々は蜘蛛に学ぶべき点が多いのではないか』と問いかけている。意味深長で哲学的な問題提起だと考えさせられたよ。」

「蜘蛛の方が蚕よりも示唆に富んでいるし、評価できる点が多いという展開になってきた。」

「トルストイはもちろん、そんなことまでは知らないし、この話からは科学的な観察眼もうかがわれないね。トルストイ後にクモの地位はどんどん上がってきた。」（一同うなずく）

「この話は、まだ続けられそう。クモが『おれの糸は強くて、パラシュートの紐にも使われているんだ。知らないのかい』と言いつつ。」

「カイコは『ぼくの糸でできた布は、ずっと昔から、大勢の人を喜ばせてきたんだ』とさらに押し返す…」

「これではエンドレスだ。短い話だったのに、こんなにいろいろ出てきて盛り上がるとは。トルストイもびっくり、だろうね。」